

渋谷散策日記

夜の十二時に起床し、ウイスキーを飲みながら四時頃までレポート課題だのノート整理だのをこなす。それが片付けば、近所にあるファミレスに行つてハンバーグライスを食す、もしくは立ち食い蕎麦屋に行つてカツ丼セットを食す。そして帰つて来て、朝の六時頃まで小説を書いたり、ネットサーフィンに興じたりする。それから朝風呂に入る。その頃になるとだんだんと空の色が変わり始める。風呂から出て一息つくと、新しい一日が始まる予感に包まれながら、布団に包まれて目を閉じる。そして就寝。

というような生活が続けていたところ、僕は見事に肥えてしまったわけである。これは由々しき事態であつた。なぜなら、現代社会をでぶとして生き抜いていくことは非常に困難な試みだからである。会う人会う人に「おやまあ、えらく太つたね!」と嘲笑まじりに言われ、健康診断では血糖値や血圧や体脂肪の値に苦言を呈される。今まで来ていた服が次々と着られなくなり、新しい服を買いに行つても合うサイズのものが一つもない。階段の上り下りが異様にしんどい。いくら食べても胃袋が一杯にならず、満腹感c/w満足感というものが無い。おまけに暑い。なんたる有様であらうか。

おりしも世間はダイエットブームであつた。怪しげなサプリメントが次々と発売され、胡散臭い整体師やら美容研究家やらが次々とスターに祭り上げられた。テンションの高い元軍人が難解な踊りを踊りまくるビデオが売れに売れ、某テレビ番組が捏造データを元に「納豆を食べれば痩せる」と報じたことが社会問題となつた。挙句の果てには岡田斗司夫までが五十キロも痩せてしまった。そんな時代だったのである。

よし、それでは一つ俺もダイエットに挑戦してみるか。根が非常に単純な人間である僕は、安易にそう考えたのだった。

しかし、何をすればいいだろうか。食うのを我慢するのは論外であつた。僕にとって食べることは人生最大の娯楽であつた。夜食や間食を我慢するというのはまだ耐えられるが、シビアにカロリー計算をしたり、肉類を禁じたり、絶食したりといった芸当は到底無理だと思われた。ではやはり、運動か。しかし運動すると言ってもどうすればよからうか。だいたい、僕はスポーツなどというものは大嫌いなのである。学校の運動会や球技会は僕にとってこの上なく恐ろしい拷問であつた。

色々と考えてみた末、とりあえずウォーキングから初めてみることにした。基本的に散歩は元々好きな性分なので、これならさして苦もなく続けられるだろうと踏んだからである。次に歩く場所であつたが、当時僕は渋谷にある学生寮に住んでいたもので、とりあえず渋谷駅から109前を経由して東急 **Bunkamura** 周辺を人通りの少ない早朝の時間帯にうついてみようと考えた。こうして、僕の渋谷散策の日々が始まつた。

——以上、前置きである。

×××××

渋谷と言えば、ちゃらちやらとした流行のファッションに身を包んだ若者たちのたむろする非常に活気のあるにぎやかな街、というイメージがあり、まあ事実その通りであり、109前スクランブル交差点なんぞは人いきれで窒息死しそうになる有様なのだが、それはあくまでこの街の一面にしか過ぎない。

時間帯で言えば、終電が出て駅のシャッターが降りる午前零時頃から、サラリーマンや学生たちが通勤・通学のため家を出る六時ごろまでの数時間は、渋谷は昼間の喧騒がまるで文字通りの「白昼夢」に思えてしまうほど、荒涼とし閑散としている。ネオンも消え、モアイ像前も、ハチ公前交差点も、前述した109前交差点も、人の姿がまったくなくなってしまう。人ごみというのは渋谷の街を形成する上での主要な構成要素であり、それがごっそりなくなってしまうのだから、ほとんど異空間のようなものに変貌してしまうわけである。ルネ・クレールが作った「眠るパリ」という無声映画があり、この作品とはあるキチガイ科学者が作った光線の力でパリのありとあらゆるものが静止してしまう、という一種のSFモノなのだが、深夜の渋谷、人間たちが忽然と消え去り、何ひとつ動いていない静寂の時間が流れて……いるのかいないのかわからない、その一種異様な光景は、ほとんどその映画の世界を地で行くようなものである。

そして夜が更けて、やがて朝が来るわけだが、眠っていた人々が再び動き出すその直前の荒廃した都市風景というのは、これまたものさびしいものである。僕は上はよれよれのTシャツ、下はジャージというなんとも情けないファッション（要するに、寝る時の服装のまま朝の散歩に出ているわけだ）で、その荒廃した風景の中を闊歩する。路傍にはゴミが散乱している。通行人たちが投げ捨てたゴミ、ゴミ捨て場に出された生活ゴミ、それらに何匹もの大ガラスがたかり、無茶苦茶に荒らしている。酔っ払いの吐瀉物があちらこちらに残されている（それを見てある知人は「まるでお好み焼きのようだ」という感想をもらした。酷い、酷すぎる！）。そして、終電に乗り遅れた酔っ払いが、狭い路地や歩道の隅に身を押し込めるようにして眠りを貪っている。

路上で眠る酔っ払いは一見マネキン人形のようにも見え、かつまた死体のようにも見える。ぴくりとも動かず、埃にまみれ、不自然な姿勢を保ったままで、朝の冷気に身を焦がしている。枕元には、ゴミが散乱している。再び動き出すことなどあり得そうにないような深い眠り。その彼らの眠りが、早朝の都市を一層静かなものになっている。

僕が今までに遭遇してきた「眠れる森の酔っ払い」たちの中で、特に忘れがたい人物についてお話しよう。

彼は、ハチ公前交差点を右に曲がってしばらく歩いたところにある、二十四時間営業の本格派とんこつラーメン屋の前にぶっ倒れていた。おそらくシメのラーメンを食べて店舗を出たところで転倒し、今に至るまで夢見ているのであると予測される。それだけならばごくごく平凡な酔っ払いであるが、問題は彼の身なりである。概して酔っ払いはラフな格

好をしているものであり、例えばスーツをびしっと着こなしたリーマンも酒が入ればこれを着崩し、挙句の果てにはネクタイを頭に巻いたり、それどころか最早スーツなど脱ぎ捨てて踊り始める、全員が全員がそんなわけではないが、だいたいそのような感じであろう。

しかし、僕が二十四時間営業の本格派とんこつラーメン屋の前で見た酔っ払いは一味も二味も違っていた。彼は見るからに高級そうな燕尾服を着込み、アイロンでビシッと折り目をつけたズボンを履き、ピカピカの革靴を履き、手にはステッキを持ち、立派な八の字髭を生やし（しかもそれをご丁寧なワックスで固め）、そしてシルクハットを被っていた。彼はピンと背筋を伸ばし、昂然と頭を挙げ、歩道の上に転がっていた。鼻が高く、目つきは鋭く、手の甲には剛毛とも表現できそうな濃い毛が生えていた。

僕は想像してみる。バーを梯子していたこのシルクハットに燕尾服の紳士、そろそろ帰ろうかと思つた途端に突然ラーメンが食べたくなって、この二十四時間営業の本格派とんこつラーメンの店に立ち寄り、革靴特有のカツカツという足音を響かせながら薄暗い階段を降り、優雅なしかし気取った手つきで食券を買い、席に着いてご大層なシルクハットを脱ぎ、そして運ばれて来たラーメンを汗をかきかき啜りこむ。彼はいっしょにライスを食つただろうか、はたまた塩ゆで卵だの木耳だのトッピングを追加しただろうか、はたまた替え玉を注文しただろうか、それは僕のおよび知るところではない。それにしても燕尾服を着てシルクハットを被った紳士が深夜のラーメン屋にいるというのは不可思議と言えば不可思議な情景である。そしてともかく、食い終わった紳士はまた背筋をピンと伸ばし、服の乱れを伸ばし、ポマードで固めた頭の上にシルクハットを被り、店を出たところであったりと倒れた。そしてそのまま時が流れ、朝となり、ふらふらと歩いて来た僕に発見された、とこのようなストーリーが展開されていたのだろう。

とは言え、そのようなストーリーが展開されていたというのは、あまり感覚的にピンと来ない。あまりにも彼の存在が唐突かつ浮遊感あふれるものであるからだ。神様がここではないどこか別の世界に生きている紳士を、切り絵細工でもするような要領で切り取って来て、渋谷の街の一角にペタリと貼付けた、そんな感じがする。この紳士は何処からやって来てそして何処へと行くのか、そんなありふれた問いも成り立たない。とりあえず**この瞬間紳士はここにいます。それが全部だ。**

この話はここまで。特に落ちはない。とにかく、あなたもひよつとすると、いつか渋谷に遊びに行った時に、シルクハットに燕尾服の紳士と遭遇するかもしれない。その時のために、心構えをしておくことをお勧めする。

××××××

しかし早朝散歩において遭遇するのは、そんな愉快な事件だけとは限らない。時には、朝食を食べる気が失せるような光景に出会うこともある。これからそれについて語るつもりだが、それによってあなたの気分が悪くなっても僕は何も関知しない。

東急 Bunkamura の辺りを歩いている時であった。交差点にさしかかった僕は、赤信号で立ち止まった。その時、ふと靴下がずり下がってしまっていることに気づき、しゃがみこんでこれを是正した。と、足元に目をやると、その辺り一面に絵の具のような、ペンキのようなものがぶち撒かれていることに気がついた。色は赤であった。一体これはどうしたことかな、そう思っているうちに信号が青になり、僕は前進した。驚いたことに、横断歩道もその塗料で真っ赤に染まっていた。これはどうしたことだろう？とふと顔を上げると、信号機の横の建物に寄りかかって座っている二人の青年の姿が目に入った。一人は裸足で、しかもその足は傷だらけであった。赤い色は、彼の足から放射線状に広がり、その辺り一帯を染め上げているのであった。

塗料ではなかった。それは血液であったのだ。

こんなにも大量の血が出るものなのか、と私は字義通り「血の海」と化している街角を、驚嘆しつつ見ていた。また、本物の血が意外にニセモノくさく見えるということも初めて知った。テレビや映画などで利用されている血糊のほうが、よほど本物の血らしく見えると思った。血を出している本人もこの光景にリアリティを見出せないでいるせいか、存外に冷静そうな面持ちで座り込んでいた。やがて救急車とパトカーが到着し、怪我人の運搬と実見分らしき調査を開始したので、係わり合いになりたくない私は首をすくめてその場を離れた。

離れたものの、胸中で好奇心がむくむくと頭をもたげてくる。一体彼はなぜあんな怪我を負い、街角を血だらけにしてしまったのだろう。僕は予定していた散歩ルートを変更して、独自調査に乗り出した。調査手法はいたってシンプルである。彼の血の跡をたどるわけである。

血の跡は、そこから駅の方面に向かって点々と続いていた。僕はそれをたどって歩き始めた。十メートルほど歩いたところで、血の跡は絶えた。そこには一軒のブティックが両脇の雑居ビルに挟まれるような格好で立っていた。そして、事件の痕跡が残されていた。

ブティックの入り口のガラス戸に、あきらかに人が蹴破ってできたとしき、足の裏の形をした穴がポツカリとあいていたのである。まるでギャグ漫画にでも出てきそうな光景であった。

以上のことから話をまとめみるとこうなる。ブティックにいた一人の青年が何らかの事情により逆上し、ドアを蹴破った。不思議なことに彼は裸足であった。青年は逃亡しようとしたが、ドアを蹴破った際にガラスで大怪我を負い、満足に走れることができなかった。血を大量に流しながら十メートルほど進んだところで力尽き、東急百貨店前の交差点にへたりこんだ。いっしょにいた彼の友人も、途方に暮れてへたりこんだ。血はどんどん流れ、街角は真っ赤に染まった。そこに僕が通りかかったわけである。

それにしても、なぜ彼はドアを蹴破ってしまったのだろうか。しかも裸足で。何が彼をそうさせたか。それは永遠の謎である。

それにしても事実は小説より奇なりとはよく言ったもので、渋谷が動き出す前、みんなが知らないうちに、ひっそりと流血事件が起きていたりもするのだ。

次にその交差点を通りかかった時には、血も割れたガラスの破片も撤去され、いつもと変わらぬ渋谷の平和な風景に戻っていた。

なんだか白昼夢のようであった。

×××××

東急百貨店の前を通過して東大駒場キャンパスを目指して歩いていると、その途中で大きな公園に差し掛かる。その公園には木々がこんもりと生い茂っていて、少し離れたところから見れば鎮守の森のようにも見える。あの109前のスクランブル交差点からたった十分ばかり歩いたところに、こんなにも緑があるとは実に *Fantastic* である。

その公園沿いの道が、僕の散歩コースのうちの一つである。こんもりと生い茂った木々の間から漏れる朝の光を浴びながら歩くのは、なかなか気持ちのよいもので、僕は好んでその道を通っているわけであるが、時折、僕と同様にその道を散歩コースと決めている「同志」と出会うこともあった。

左図は、同志の勇姿である。



それで、彼が何者かと言うと、まあ見ての通り亀である。おそらく彼は普段は公園の中

に作られた池に住んでいて、お日様が恋しくなるとこうして外へ出てきて歩道をのたくり回っているのだろうと思われる。

いつ会っても、亀は実にひっそりと散策を楽しんでいる。そのマイペースかつ奥ゆかしい姿勢は賞賛に値するものであるが、たまにびっくり仰天させられることもある。それは梅雨の中休み、久しぶりに空が晴れたとある朝のことである。

申し合わせでもしたのであるか、何十匹という亀の大群が一斉にぞろぞろと池から這い出し、公園を脱出し、道路を埋め尽くしていたのである。寝ぼけ眼をこすりながらそこを通りかかった僕は、自分の目を疑った。歩道も車道も亀の甲羅だらけ、足の踏み場もない有様！あたり一面、磯臭いような生臭いような空気がたちこめ、息が詰まりそうだった。何十もの亀の甲羅によって完全に道路は覆われ、まるで道路そのものがうねりながら右へ左へ揺れているように見えた。

しかし更に驚いたのは、その数分後にコック・コートを着た中年男が自転車に跨り颯爽とやって来て、その亀たちを次々と回収し始めたことである。中年男は浅黒くしわの刻まれた肌と、ギョロリと飛び出した巨大な眼球を有していた。彼は公園から見て北西の方角——その方角には、一般的イメージとしての渋谷には似つかわしくない、閑静な住宅街が広がっている——からやって来た。しかし彼が何者であるか、それは誰にもわからないし、もちろん僕も知ったことではない。

中年男は自転車からひらりと降りるなり、黙々と仕事を始めたのだった。目を見張るような手際の高さで亀を拾っては巨大なビニール袋に入れ、ものの五分ほどで全部捕獲してしまったこの英雄に、僕は畏怖の念すら抱いた。

感嘆してその仕事ぶりを眺めていた僕に、彼は白いものの混じった口ひげをひくひくと動かしながら、「こいつら、意外にいいスूपがとれるんですよ」と言っってはにかんだように笑った。

へえー、そうなんですか、意外にいいスूपがねえ。僕は曖昧に笑った。

彼の手に握られたビニール袋は、何十匹もの亀でばんばんに膨れ上がっていた。彼はそれをかつぐと、誇らしげに口ひげをしごいてみせた。

その中年男と遭遇したのは、この一度きりである。

何はともあれ、こうして渋谷の平和は、亀たちの魔の手から見事守られたわけである。

それにしても、亀というのはつくづく不思議な散策者だ。なにしろ彼らは、立ち止まったところが家になるのだから。

××××××

渋谷 Bunkamura の近くにある人気の温泉施設が爆発事故を起こしたのは、僕が散策を始めて一カ月ほど経ったある日のことだった。

大学の授業が終わり、ブックファーストかHMVにでも寄って帰ろうかとぶらぶら道を歩いていた夕暮れ時。鎮守の森のような公園を通り過ぎ、もうすぐ東急百貨店にさしかかると言う所で、向こうからばたばたと何人も警官が走って来た。どうしたのだろうと思っっていると、その先には何台ものパトカーや消防車が停車し、ビニールテープが張りめぐらされ、警官たち、消防士たち、腕に新聞社やテレビ局の腕章をつけたマスコミ関係者たち、そして大勢の野次馬たちがたむろしていた。

一体なにごとだ。僕は即座に野次馬の一員となり、事の成り行きを見守ることにした。野次馬たちは、通りの角にある駐車場のフェンスの前に群がっていた。フェンスの向こうにはカメラや集音マイクを抱えた報道陣たちがおしくら饅頭をされていて、黄色のビニールテープで区切られたさらにその向こうの通りには消防士や救急隊員が右往左往していた。

「救急車が通りますんで、すみやかにどいてください！」救急隊員は拡声器で必死にそう怒鳴っているのだが、報道陣は救急車を通そうとする素振りなど見せず、むしろ救急車を撮影しようと雪崩をうって駆け寄り、道を塞ぐばかり。救急車はカメラと脚立と集音マイクに囲まれて、少しも動けない。一体なにごとだ。

野次馬たちはめいめい携帯電話を掲げ、救急車と報道陣の小競り合いを写真に収めていた。中には家に電話をかけ、「もしもし。ちょっと帰るの遅くなるから、ジョン（※犬の名前らしい）の散歩をよろしく」なんて会話をしている人もいる。しかし、いつまでたっても何が起きているのか、さっぱりわからない。

暫く経って救急車は、怪我人を乗せて引き返してきた。またぞろ、わらわらと報道陣が道を塞ぎ、集音マイクが祇園祭の幟のように天を突いた。「通ります！どいてください！」という電氣的に拡張された救急隊員の悲痛な叫び声が空しくこだました。『救急車は三人目の負傷者を運んでいるらしい』ということが周辺の人たちの話からわかった。救急車にむしゃぶりついてゆくビデオカメラの群れが、心底おぞましいものに見えた。

それから長い格闘を経て、ようやくと救急車は走り去った。それを見届けると、僕はポケットから携帯を取り出し、実家に電話をかけた。数回ベルがなった後、父親が出た。

そしてようやく、東急百貨店近くにある温泉施設が爆発事故を起こしたことがわかった。今さっきテレビで特番をやったよ、と父親。ああそうかい、実は今その現場のすぐ近くにいますところなんだ――

僕は電話を切り、再びそれをポケットに収納した。それにしても、現場から数百メートルも離れていない僕が、現場から数百キロは離れた場所にいるであろう父親から事故の状況を教えてもらうというのは、なんともおかしい話であるよな。

その時、不安定な脚立の上に立った小太りのアナウンサーに向かって、ひげ面のカメラマンがキューを出した。僕はそれを合図に回れ右をし、そして帰途に着いた。

寮に帰り食堂に顔を出すと、案の定爆発事件の話で持ちきりであった。僕は運ばれてきた飯をもぞもぞと食いながら、寮生たちの話に耳を傾け、そして時たまテレビのニュースに目をやっていた。もちろん、テレビも爆発事件の話題で持ちきりだった。とうとう三人目の死者が出た、とキャスターが言い、僕は思わずどきりとした。ひよっとして、僕が目にした救急車で運ばれていたのは、まさにその人だったのかもしれない。

事故の翌日から数ヶ月の間、温泉施設の入ったビルの表には黄色いビニールテープが張り巡らされ、見張りの警官が立つようになった。ビルの前の道路は僕の朝の散歩コースであるのだが、ぼくがどんなに早く起きた朝も、滝のような雨が降った朝も、そこを通りかれば必ず警官が仁王立ちになっていた。そのうち、警官の横には献花や供物をするための台が設置され、通行人が思い思いに花束やジュースなどを供えるようになった。

散歩用のジャージに身を包んだ僕は、肩をすくめるようにして警官の前を通り過ぎた。その時ふと、台の上に鎮座ましましている、誰かが供えたコーヒ―牛乳とフルーツ牛乳の瓶が目に残っていた。

確かに、あれらは銭湯には欠かせない飲み物なものな。

×××××

さて。

これから、朝の散歩で見かけた猫の死体について（特に何の脈絡もなく）物語ろうと思う。かの高名な志賀直哉も、蜂だの鼠だのイモリだのの死体を俎板にのせ、アレコレ文章を書いたものだ。その伝統を抛り所として、と言うか免罪符にして、と言うか言い訳にして、猫の死体について語ってみたい。

さて。

僕が猫の死体を見かけたのは、爆発事故から一週間ぐらい経ったある朝のことであった。場所は、事故を起こした温泉施設が入っているビルから、ほんの数メートルしか離れていないところである。

猫は黒猫で、車に跳ねられたのが死因のようだった。死体には、ほとんど外傷というものもなかった。薄ら笑いたような口元から、一筋の血が垂れているだけであった。僕はそれを見て、何故か薄ら寒いような気分になった。

不思議だった。僕は、この猫の死体よりもっとグロテスクで残酷な死体を幾度となく見たことがある。僕は岡山の片田舎で生まれ育ったのだが、山沿いの田舎道に車に轢かれた動物の死体が転がっているのは日常茶飯事であった。頭をかち割られて脳髓が露出した狸。腹部が裂けて大腸がはみ出したイタチ。何十台もの車に押し潰されるうち、もはや何

の動物だったのかすら判然としなくなってしまった、毛皮つきの真っ赤な肉塊。しかし僕はそれらを見ても存外に平気であった。はあ、狸が死んだ。ほお、イタチが死んだ。な。へえ、何かよくわからん奴が死んだ。その程度の認識であった。

しかしどうだろう、かように心臓の強いはずの僕が、一片の臓器も露出させることなく「きれいな」状態で死んでいる黒猫にびびらされているのである。

動かない黒猫は一個の物体であった。生き物はどんなものでも死を迎え、死を迎えれば物体と化す、というのは何百回も聞かされた**新鮮味のない**言説だが、僕はなぜか**新鮮な**違和感とともに猫を見ていた。なんて「物体らしい物体」なのだろう！と僕は密かに感嘆していたのである。日常生活において、僕がうんざりするほどよく接している数多くの「ただの物体」——鉛筆／消しゴム／リモコン／パソコン／醤油差し／洗濯機／電池／時計／その他いろいろ——そういった馴染み深い「ただの物体」のどれよりもその死体は「物体」らしく見えたのである。唐突に「物体」があらゆる事象から己を切り離してしまい、「物体」としての存在感を僕にアッピールしている、そんな雰囲気でした。

しかし、最も僕の心を捉えたのは、その猫の死に顔、薄ら笑いを浮かべたような口元の曲線であった。これを見て、まず思い出したのは宮沢賢治である。彼の童話の登場人（動物たちの多くが、その最期には笑顔を浮かべて死ぬのである。そして、そのシーンが——こういうことを書くと、数多くいらっしやる宮沢賢治信奉者の方々から反発を食らうかもしれないが——なんとも恐ろしいのである。しかし恐ろしいと言ってもその感情は薄気味悪さや不気味さなどのオカルティックな反応に由来するものではなく、ある種の「畏怖」のようなものと似通っているのである。こと、『土神ときつね』や『ひかりの素足』といった作品は、非常に哀しく読後には思わず涙してしまふこと請け合いの名作なのだが、それでも僕は涙する一方で、主人公たちの浮かべた幸せな死に顔から、生と死の間に横たわる形容不能の恐ろしさを感じたものである。しかし——とりあえず「死に顔＝微笑」ということで宮沢賢治を思い起こしたのだが、この猫の浮かべている間抜けな笑顔は、どうもそれとは趣を異にするものであるように思えてきた。確かにその微笑からは、ある種の宗教的崇高さのようなものの一片が感じられはしたもの、それよりもっと下世話で、人を小馬鹿にしたような表情だったのである。そこで思い出したのが『不思議の国のアリス』にも出てくる妖怪「チェンパ猫」である。

チェンパ猫は、いつも薄ら笑いを絶やさない猫のだけものである。なるほど、改めて考えてみれば、猫というものは本来さして笑顔を見せない動物であり、その猫が常に笑っているというのは、それだけで十二分に不気味であるのだ。

ボルヘスの著した『幻獣辞典』によれば、チェンパ猫の由来は諸説あるようである。その昔、チェンパ州で歯をむき出しにしている猫の顔をかたどったチーズが売られており、これが起源であるという説（……とりあえず、そのチーズがあまり食欲をそそる商品でなかったことだけは確かだ）。その昔チェンパ州は伯爵領であり、その地の猫たちは自分たちが高貴な土地の生まれだということで、いつも得意げな笑顔を浮かべはしゃいでいたと

いう説（……なんという通俗的な猫どもであろうか！）。他にも色々解釈がある。しかし結局のところ、どの由来が正しいのかは判然としない。当然だろう、チェシャ猫自体が判然としない存在なのだから。

『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫は、ゆっくりと姿を消し、しかし姿を消した後もなお——もちろん、顔も、口も、歯も消え去ってなお——薄ら笑いだけをそこへ残していく。

この黒猫も、まさにそうであつた。翌日早朝、僕がまたぞろその路地を通りかかった時、とうに死体は撤去されていたのだが、**あの薄ら笑いだけは残っていたのである**。薄ら笑いは質感を伴わない存在感でもって、渋谷の一角を歪めていた。何と気色の悪いことであろうか、いつもと変わらぬ日常が戻っているかと思えば、薄ら笑いだけが空気の底に沈殿しているのだから！

僕が思わず嫌な顔をしていると、ビルの下で見張り番をしている警官と偶然に目が合った。警官は僕の表情を自分に向けてのものだと解釈してしまったようで、僕を鬱陶しそうな眼で睨み返してきた。おまわりさん、それは誤解だ、誤解なんだよ。

×××××

と、おまわりさんの登場で幕を下ろしたかに見える猫の話には、実は続きがある。

それから一週間ほど経つと、さすがの薄ら笑いも文字通り薄れてゆき、ついにはなくなつてしまった。僕はすっかり安心して、また単調で平穩な散策の日々を送っていたのだが、ある土曜日の蒸し暑い夜に、またぞろあの薄ら笑いとお会つてしまった。

それは東急百貨店前の交差点であつた。僕はいつものように散歩の最中、白い無地のTシャツと破れたジャージの下という渋谷に似つかわしくないファッションでたらたらと前進していたのだつた。朝晩の散歩を始めてから、一ヶ月ちよつとが経過していた。なんとなく、腰周りの余計な肉は減つたようにも感じていた。しかしどうなんだろう、俺は本当に痩せられるのかしらん。僕はぼんやりとした不安を抱きつつ、ショーウィンドーに映つた自分の不恰好なシルエツトを眺めていた。

と、その時、ショーウィンドーに不吉なものが映っていることに気づいた。そは何ぞ？我が醜い肉体なりや？それもある、しかしそれ以外にもう一つあるのだ。そは何ぞ？それは——薄ら笑いを浮かべた女の姿である。

僕は思わず振り返つた。僕の視線はすぐに女を捕らえた。女は着物のような毛皮のような気色の悪い衣装を身にまとい、僕の真横に佇んでいた。不自然に背中を丸めた彼女の顔はよく見ると毛で覆われており、目は黄色く光を放ち、唇の間からは鋭い歯と真つ赤な舌が見えた。そして、薄ら笑いを浮かべた口元からは、一筋の紅が滴っていた。

「久しぶりね」

女は軽く握つた拳を僕の肩に置き、そう話しかけてきた。生ぐさい吐息が僕の鼻にかか

った。僕は若干の気色悪さを覚えつつ、「何？あの時の猫？」と尋ねた。

女は「ピンポン」と言うなり後ろを向いた。僕の目の前に、巨大な猫の尻尾が突き出された。しかも、その尻尾は二本に枝分かれしていた。猫又だ、こいつとうとう、猫又になりやがった。僕は顔をしかめた。黒猫の猫又は一番たちが悪いと聞く。つくづく俺は、運の悪い男だ。

「なんの用ですか」

「アラ、ずいぶんつれないんじゃない。」猫又は、神経を逆なでするような猫なで声で拗ねて見せた。「馴染みの仲じゃない」

「俺は貴女と馴染んだ覚えはありませんが」

「またそんなこと言つてエ」と猫又はするすると日本の尻尾をしまいながら言う。「あんた、私の死んだ場所に毎日通（かよ）つてたじゃない。もうすっかり、馴染みの仲よ。」と、わけのわからぬことをぬかす。化け物の論理にはついていけない。

「通（かよ）つていたのではなくて、通（とお）つていただけです」と僕。「それで、なんか用でもあるんですか？」

「何よ、喧嘩腰ねエ」と猫又は膨れっ面をする。「散歩好きなあんたに、ちょっと面白いコースを教えてあげようと思っただけよ。」

あんた、毎日この辺り散歩してるでしょ。でも、いつまでも地上にへばりついて、同じ所をぐるぐる回つても退屈でしょ。だから今夜は特別に、人間どもは普通通れない、不思議な散歩道を案内するわよ。ついといで」

猫又は、軽く握った両の手の拳を顔の前で揺らしながら、喉を鳴らした。そしてくるりと踵を返すと、背後に聳え立つ東急百貨店の建物に駆け寄り、その壁をするすると登り始めた。猫又は登りながら、「あんたにも術をかけたから大丈夫！さっさと登つてい」と僕に向かって叫んだ。すると、考える間もなく僕の肢体が奇妙なリズムを伴って踊りだし、あれよあれよと言う間に僕は東急百貨店の壁に吸い寄せられていた。まるで猫のような動きだ——僕は僕のことを離れて活動を続ける我が手足を驚嘆のまなざしで見つめながら、そう呟いた。土曜日の街は、サカリのついた若者たちが押し合いへし合いを繰り返し、息苦しいほどだった。僕は猫又の後に続いて、するすると東急百貨店の壁面をよじ登って行った。不思議と、恐ろしさは感じなかった。ただ、**とんどん地面が遠くなっていく感覚**だけを感じていた。

それから僕と猫又は、毒々しい電飾看板の間をすり抜け、はるか足の下に米粒のような人間たちがひしめいているのを眺めながら、空中散歩を楽しんだ。我々はビルからビルへと飛び移り、飛び移り、飛び移り、上機嫌で歩みを進めた。時折、天に向かって吼えもした。爽快だった。

その爽快さ加減をもっと詳しく描写したいのだが、僕の貧弱なボキャブラリーではとうてい無理な話だ。いや、それ以前に、人語ごときで表現できるものなど、たかが知れてい

るのである。

やがて終電が出る頃になると、潮が引くように通りからは人が消えていった。そして、まるで「パチン」と蛍光灯のスイッチを切ってしまったかのごとく、渋谷の街は停止してしまった。そんな静寂の世界を、僕と猫又はどこまでも飛び回るのだった。

×××××

朝が来た。僕と猫又は朝の冷気を肌を感じながら、すると地面に降りていった。猫又は黒猫の姿に戻り——しかし、尻尾は相変わらず二股に分かれていた——薄ら笑いを浮かべたままで何処かへ走り去って行った。きつと、この街の雑踏には何百、何千匹という化け猫どもがひしめき合っているのだろう。僕はそう思った。

僕は猫又の後姿を見送ると、その場にこてんと横たわった。心地よい疲労感と眠気が、体の中に沈殿していた。考えてみれば夜通し歩いていたのも、そりゃあ疲れるさ。僕は頬にひんやりとしたコンクリートの肌触りを感じながら、静かに呼吸をしていた。かすかに、とんこつラーメンの香りが漂ってくるのを感じた。ははあ、ここは二十四時間営業の本格派ラーメン屋の前なのだな、と僕は考えた。朝の光に照らされた歩道の上で、僕はゆっくりと眠りに落ちつつあった。

ふと人の気配を感じたので、薄目を開けて様子を窺った。傍らにシルクハットに燕尾服の紳士が立っていて、困惑した表情で僕を覗き込んでいた。どうやら僕に寝場所を占拠されたので、途方にくれているらしかった。

僕は若干の申し訳なさを感じつつ、再び目を閉じて眠りの体勢に入って行った。なにしろ彼は紳士なのだから、きっと僕の非礼も見逃してくれるに違いない。